

きのこ歳時記3

蕪村・一茶時代の俳諧より

今野 英山

今回は、江戸中期の与謝蕪村と、江戸後期の小林一茶の時代を取り上げてみたい。

芭蕉の没後、俳諧は次第に低迷していった。職業化した俳人（宗匠）が門戸を競い合う中、俳諧は大衆化する一方で技巧主義と通俗化の風潮に覆われていた。

芭蕉50回忌頃より、こつした傾向への反省から「芭蕉に還れ」という運動がおこった。いわゆる中興期俳諧である。その中心にいたのが与謝蕪村（1716-1783）であり、中興の祖と呼ばれている。蕪村は池大雅と並び文人画家としても有名であり、そのためか俳諧もまた絵画的であり、写实的、浪漫的、懐古的であるといわれている。

茸狩や頭を挙（あぐれば峰の月）（与謝蕪村）

茸狩りといえは通常はマツタケ狩りのことである。マツタケ狩りをしていてふと山のほうを見ると、嶺には月がかかっていたという句。夢中になっていたらもう月の出る時刻となったということだろうか。それともまだ月の出ている早朝なのだろうか。月といえは、同じ蕪村の句「菜の花や月は東に日は西に」を思い出す。

君見すや拾遺の茸（たけの露五本）（与謝蕪村）

門人に招かれて、宇治の山に松茸狩りに行ったときの句である。



蕪村はこの時六十七歳。若者に遅れつつも5本も採れた喜びを「拾遺（採り残された）の茸」と表現したのだが、これには文学的背景がある。

「宇治拾遺物語」の中で宇治の山のヒラタケの話があり、その話に対して蕪村は、「ヒラタケなんかより松茸の話を書き漏らしている（拾遺）ではないか」という意味をかけてこの句を作ったらしい。なかなか奥が深い。記録ではこの年の師走に亡くなっている。

心憎き茸山越ゆる旅路かな（与謝蕪村）

「心憎き」は心惹かれるという意味。旅先で松茸山を越える時、ついつい心が惹かれてしまうという句。わかるわかる。

茯苓（ぶくりょう）は伏かくれ松露はあらはれぬ（与謝蕪村）

ブクリヨウ、シヨウロともに松林に現れる茸。その生態の特徴をとらえた句。

昔の人は地中にできる茯苓を不思議に思ったようで、「松脂が地中に入つて千年たつと茯苓になる」とか、「松の精気が変じたものだ」とか考

えて珍重していた。「茯苓」ということは、松の神霊の気が伏してできたものという意味で古くは「伏霊」と書いていた。利尿などの効用から漢方薬には欠かせない材料である。

松露は、本朝食鑑(1697年)によると松の津気が凝結してできたもので、それで松露というのである。茯苓のまだ年を経ていない幼稚なものだとも言われている。(引用 月刊誌「特産情報」(農村文化社)「特産奇譚・きのこの情景」)

蕪村の弟子として名高い俳人に高井几重がいる。師である蕪村の補佐をして一門の信任を得、師没後は蕪村の別号「夜半亭」を継いでいる。

紅茸やつつくしきものと見て過る(高井几重)

美しい。しかしただそれだけのことである。

めかれたる松茸市の夜さむかな(高井几重)

夕方遅く次第に見えなくなる松茸市の風情を詠んでいる。

市に出るひら茸うりは法師かな(高井几重)

僧侶が寺の立ち木に生えたヒラタケを売りに茸市に出店しているということか。

上を見ぬ目にも欲あり菌狩(きのこがり)(横井也有)

横井也有も中興期の俳人。尾張藩の重臣の家に生まれ、寺社奉行などを勤め、隠居後に俳諧のみならず和歌、絵画、狂歌など様々な分野に親しんだ。

役人であったことを考えると、「上を見ぬ目」というのは「出世を望まぬ目」と「下を向いて松茸を探す目」とをかけていると句と見た。

中人に見まふ和尚や茸がり(炭 太祇)

炭太祇(たん たいぎ)は諸国を行脚した後、仏門に入り大徳寺(京都)真珠庵に住んだが、島原の遊郭に不夜庵と名づけ定住する、といったかなり破天荒な人物である。蕪村と親しく、僧侶でありながら「恥しやあたりゆがめし置巨燧」のような艶っぽい句も詠んでいる。

野外での芝居の中入りであろうか。芝居の合間についつい茸を探してしまつ和尚のおかしさを詠んだ句である。

この他の中興期俳諧の作品を何点か紹介する。

降出して茸狩残す遺恨かな(黒柳百波)

恨みの雨である。

まつだけの灰やき寒し小の奥(加藤暁台)

野の奥に家(庵か?)があり、松茸を囲炉裏の灰の中で焼く様子。

打杖に毒ある菌(きのこ)さくき哉(加舎白雄)

棒で毒キノコを蹴散らしながら行くつもりか。

霧雨や白き木子の名は知らず(松窓二一)

霧雨の中の白茸。絵画的な句である。

松茸や波こす袖酢をしぼりつつ(最上常矩)

北方探検家として知られる最上徳内(常矩)の句。江戸後期、幕府の蝦夷地検分隊の一員として蝦夷地(北海道)に赴いたのが最初で、その後、択捉・国後などの北方諸島を含めて生涯で9回も訪れ、調査を行い、探検家として高い評価を受けた。

「波こす袖酢をしぼりつつ」とは、後拾遺和歌集の中の「ちぎりきな(誓い合いましたよね)かたみに(互いに)袖を絞りつつ

(涙で濡れた袖を絞りつつ)末の松山波越さじ(心変わりしない)
とは「(清原元輔)のパロディと思われる。

心変わりしても袖酢を絞った松茸は捨てがたいと言うような意味か？

小林一茶(1763-1827)は貧農の長男として信州柏原に生まれる。江戸へ奉公に出て俳諧を学んだ。三十歳から三十六歳まで俳諧の修行のため近畿・四国・九州を歴遊する。再び江戸に戻り俳諧の宗匠を務め、五十歳で再度故郷に帰る。3度結婚するが、子供を相次いで亡くしたり、遺産相続で継母と争ったりなど家庭的には恵まれなかったらしい。

初茸を掴りつぶして笑ふ子よ(小林一茶)

せつかく採った初茸を子供が無邪気にも握りつぶしてしまっ
た。おおらかな句。

初茸や踏つぶしたをつぎて見る(小林一茶)

ああもつたいたい。未練たつぷりの句。

初茸の無疵に出るや袂から(小林一茶)

初茸を採って籠に入れると、大抵はぼろぼろになってしまつ。
形のいい無傷のものを確保しようとするよほど丁寧に扱わな
いといけない。ほら、こんないいやつが採れたよとおもむろに袂
から出す、茶目つ気のある句。

手の前に蝶の息つく茸哉(小林一茶)

茸を採ろうと手を伸ばしたその先に蝶々がゆっくりと羽根を
休めていた。のどかな句。

切株の茸かたまる時雨哉(小林一茶)

千葉県利根町の来見寺にきた時の句。文化三年十月二十五日と

ある。旧暦の十月二十五日はもう冬である。時雨も冬の季語であ
る。とするとこの茸はヒラ茸かエノキ茸かクリ茸か。

大茸馬糞も時を得たりけり(小林一茶)

この茸は何であるうか？ハラタケの仲間だろうか。
ハラタケ属のアガリスク茸は馬糞で栽培するそうである。今か
ら二十年程前にカナダのマッシュルームの工場を見学したこと
があるが、この苗床は一面の馬糞だった。まさに時を得て食卓に
上るといわげだ。

人をとる茸はたして美しき(小林一茶)

怒りを込めた句。親しい人が亡くなったのであろうか。

うつくしやあら美しや毒きのこ(小林一茶)

一方で毒キノコほ
ど美しいというのも
真実。死んでもいいか
らこの美しい茸を食
べてみたい、そんな茸
に会ったらどうする
か。



【ベニタケ 北八ヶ岳にて】

さびしさや菌(きのこ)のかさの窪たまり(鈴木道彦)

鈴木道彦は仙台の人で一茶の時代の有力俳人。当時人気絶頂で
画賛、屏風、唐紙、短尺などが飛ぶように売れたらしい。
老成して窪みのできた茸にものあわれを感じた句。

茸狩や知らぬ祠に手を合わす（井上井月）

井上井月（せいげつ 1822～1887）は越後に生まれ、江戸に遊学し俳諧や書芸を学んだ後諸国行脚の旅に出る。江戸末期に伊那に現れ、俳句に志のある人々の家を泊り歩いたり野宿をして伊那谷をさすらった。北信濃の俳人小林一茶と双璧をなす俳人として、伊那の文化遺産の一つとして位置づけられる。

井月は芭蕉を慕い、その句は庶民の哀歡を詠っているものが多い。祠に手を合わすのは、松茸に多く出会えることを祈願したのか、山の神への畏敬のためか、はたまた山の中での安全祈願か、この句は現代にも通じる句である。



【松茸 二〇〇五年一〇月山形県高島にて撮影】

今回は明治期の正岡子規と高浜虚子の時代の茸の俳句を紹介する予定。

海外旅行の楽しみ キノコグッズ編（2）

吉田 悦子

2006年11月21日から3週間ほど、ニュージーランド北島を旅しました。主要都市オークランドは海に囲まれ、いくつもの古い火山の上にできた坂の街です。中心街から10分位坂を上り下りすると、昔清掃工場兼発電所だったという、古い赤レンガの建物で煙突のあるビクトリア・パーク・マーケットに行くことができます。ここは常設のマーケットでお土産屋さんや工芸品店が数多く並んでいます。ここでファミリーという名の木製きのこマジックマッシュルームという名の陶器製のきのこを見つけました。（写真の真ん中の奥と手前）

